

2024年12月3日取材

静岡県

産地レポート

レタス

JAハイナン 肥大と形状が安定する

「Dプロウ」

12月の安定出荷に期待！

(編集部)

静岡県内一のレタス産地

「お茶、水稲、レタスの複合経営が当地の特徴」と話してくれたのは、JAハイナンの流通販売部販売推進課の大石光太係長。畑から見渡せる牧之原台地には、日本屈指のお茶の産地を物語るように茶畑が見渡す一面に広がっていました。

レタスの栽培は水田裏作の品目として作付けされ、その面積は全体で約130ha。静岡県内最大の栽培面積を誇り、2023年度の実績では出荷数約43万ケース、売上高約7億5000万円。県内消費はもちろん、立地を生かして京浜市場へ出荷されます。区画整備された畑には、100mの畝にレタスが整然と植え付けられていました。

お茶との複合経営をする榛原地区と相良地区、水稲との二毛作中心の吉田地区の3地区に分かれ、ハイナンレタス委員会の会員数は112名を数えます。



地域概況

1993年3月に当時榛原郡南部の3農協（南榛原・榛原・ハイナン吉田）が合併し誕生したJAハイナンは、大井川西岸に広がる牧之原台地の一角に位置しています。牧之原台地は日本最大のお茶産地となっており、そこから生産されるお茶は特に質のよい味と香りを誇っています。管内で生産される農産物としてお茶の次に取扱金額が大きいレタスは静岡県下1位の生産量で、そのほか温暖な気候を生かし、ダイコン、メロン、イチゴなどが栽培されています。



↑牧之原台地の斜面に広がるお茶畑の眼下にはレタス畑が広がる。

気温の乱高下が大 きい時期にも安定

す。出荷の最盛期は12月～2月となりますが、吉田地区は田植え準備前の5月の連休まで栽培されます。

「Dプロウ」はレタス委員会役員の畑で数年間の試作を経て、2022年に管内で栽培され、会員向けに展示して公に紹介されました。当時の作付は一部に留まっていたましたが、口コミでも



↑前列右から、JAハイナン流通販売部の大石光太係長、生産者の米津信之さん、奥がJAハイナンの水野優さん。



→
品種の選定は数年の試作結果から判断して慎重に決めるという大石さん(左端)。



↑10月14日定植の「Dプロウ」。
12月中旬ごろの収穫に向け、
ビニール被覆の準備が進んでいた。



←
近年、12月においても気温が安定しない中、「Dプロウ」は形状の乱れが少なく順調に結球していた。



←
肥大と品質を安定させるために被覆資材を設置。生産者によってビニールまたは不織布を使う。作業は政子さんがポールを立て、米津さんがビニールをかけていく。



↑米津さんの父：栄さんと母：政子さん。米津さんは家業の農業を継ぎ、レタス1.6ha、水稲3ha、お茶3haを栽培する。3品目を始めて約40年になる。



品種の評価が広まり、徐々に導入する生産者は増えていくといいます。
生産者の収益安定のために慎重に品種選定が行われた結果、「Dプロウ」は2025年は栽培暦に掲載される予定です。
近年の気候変動の影響で11～12月は天候や気温が安定せず、安定出荷が難しくなっています。課題は、形状や肥大のスピードが安定しないことでした。「Dプロウ」は形状が安定して、お尻もきれい。肥大しても大きくなりすぎず、L・2Lサイズでまとまります」
現在ハイナレタス委員会が役員を

務める米津信之さんは、試作品種の中から「Dプロウ」の特性を知り、2023年から作付けを増やし、2024年は約20aで導入されています。
「形状のまとまりのよさはラッピングがしやすく、品種選定基準の一つにもなっています」
会員の多くは収穫後、人手でラッピングを行うか、米津さんのように自動包装機を導入している人もいます。出荷調整時の取り扱いやすさも「Dプロウ」のよさと大石さんは話されていました。

レタスを基幹品目として

10月中旬定植、12月中旬以降に収穫する品種として「Dプロウ」は採用予定です。10月はお茶の秋収穫や、秋雨の影響で天候が安定せず、なかなか計画的に定植ができません。そのような状況の中、肥大が安定し形状の乱れが少ない「Dプロウ」には期待が寄せられていました。他方で、10a当たりの出荷数350ケース(2L、1ケース15玉)を安定出荷していくために「Dプロウ」の特性が生きたとの評価は、近年の栽培条件が厳しさを増していることを物語っていました。

最低気温5℃、平均気温10℃を下回るタイミングを基準に被覆資材を設置することをJAとして推奨し、保温効

果で肥大を順調に促す栽培管理の工夫が加わって良品生産が実現されています。被覆資材の設置は雨風による病害の発生軽減や品質維持にも寄与します。
一方で、2024年は害虫の発生が多く、虫害が病気の発生源にもなったため、例年より防除回数を増やすなど栽培管理に苦労していました。
「レタスは当地の基幹品目として位置付けています」

ペットボトルのお茶の需要拡大によって茶葉からいれる緑茶の需要が減少し、お茶の栽培面積は年々減少しています。茶葉の代替作物として、イチジクなど収益性の高い品目への切り替えも徐々に進んでいます。そんな中、レタスはJAハイナ管内の収益安定の基幹品目となっています。価格の乱高下が比較的少なく、冬が温暖で京浜市場への輸送もしやすい地の利を生かせる強みがあるためです。

近年の不安定な天候で市場価格は高くなっていますが、物価高騰で栽培経費も増え、まだ再生産価格としては十分ではないといえます。市場との価格交渉しながら生産者の安定した経営を支える担当者の方々の努力とともに、「Dプロウ」がJAハイナの年内どりを支える品種に育つことを期待します。